

第291回くらしの植物苑観察会 令和5年6月24日（土）

「梅雨の花ばな」

辻 誠一郎（東京大学名誉教授）

梅雨という季節

今は6月の下旬で、暦の上では11日が入梅、21日が夏至でした。そして夏至から11日目の7月2日が半夏至にあたり、梅雨の盛りに差し掛かっています。古くから日本の季節は、春・夏・秋・冬の四季に分けられてきましたが、このような区分は気温と植生景観の変動にもとづいています。少し視点を変えて降水量の季節配分に着目してみると、春・梅雨・夏・秋霖・秋・冬と六季に分けられ、さらに近畿地方や関東地方では春・梅雨・夏・秋霖・秋・山茶花梅雨・冬・菜種梅雨というように八季に分けることも可能です。どうしたことかという、雨の多い季節と少ない季節を重視すると、夏の前半を梅雨、秋の前半を秋霖、さらに冬の前半を山茶花梅雨、春の前半を菜種梅雨とすると、一年を六季あるいは八季に分けることができるのです。昨今、降水の季節配分は水害などの災害を考える上で重要視されてきたかに見えますが、植物の生存・生育にとって降水の季節配分はむかしから重要であったのです。現代社会では、雨を嫌い、雨を恐れるあまり、かつては暦に梅雨や秋霖を刻み込み、多雨・少雨の季節感を忘れ去ってきたのかもしれませんが、それだけ農事から離れてしまったのかもしれませんが。

五月雨月は6月から7月の梅雨の時期にあたります。そのように考えると、クリ、トチノキ、サカキ、ハンゲショウなど梅雨の花々はけっこうぎやかで、アジサイしかないなどとはとても言えないのです。

クリとトチノキ

スタジイの開花はすでに終わっていますが、それに代わって梅雨にはクリの開花が始まります。スタジイの雄花のあの強い香りとよく似た香りが漂っていれば、そばにはクリの木があるはずで、黄白色の尾状の長い花序を花火のように放出したという感じです。ミツバチがたくさんの花粉を運んで、高品質なクリ蜂蜜を作ってくれます。

同じように高級な蜂蜜の原料を提供している植物があります。トチノキです。その花はとて華やかで、雌雄混成の赤みがかったたくさんの花が集まって円錐状の花序を直立させています。近づくといい香りがしてきます。

クリモチノキも縄文時代から重要な食料であり、ミツバチによって花粉が運ばれ、結実したその果実は生活に豊かさをもたらしたにちがいありません。縄文人の精神世界においても重要な位置を占めていたと思われます。

サカキとヒサカキ

サカキは神さんに、ヒサカキは仏さんに供えられる植物です。ヒサカキはビシャとも呼ばれています。梅雨の時期、サカキは白色の可憐な花を咲かせます。同じサカキ科に属する近縁のヒサカキはすでに春に開花を終えています。梅雨の時期には小粒の仁丹のような果実をつけていることでしょう。

仏さんにはシキミの枝葉を供えるという地域もあります。シキミも開花はすでに終わっていますが、この時期では奇妙な形をした緑色の果実を見ることができます。

ハンゲショウとドクダミ

夏至から 11 日目の半夏生のころ、梅雨の真っ盛りに、直立した尾状の花序が少し垂れ下がり、その下の 2, 3 枚の葉が葉緑素を失って真っ白になるのがハンゲショウです。白粉(おしろい)で化粧したかのようで、もとは半化粧ではなかったかと思うのですが。ハンゲショウとはまったく違うサトイモ科のカラスビシャクが「半夏生ず」の植物だと言われていますが、両方とも農事など生活に深くかかわってきたことは間違いありません。ハンゲショウと近縁のドクダミもあちこちで開花しています。比較してみましょう。

このほか、アジサイやアマチャ、ケンポナシなど梅雨の花々を楽しんでみましょう。

.....

次回予告 第292回くらしの植物苑観察会 令和5年7月22日(土)

「佐倉城址公園の地衣類」

坂田 歩美(千葉県立中央博物館 生態学・環境研究科研究員)

13:30~15:30 くらしの植物苑 東屋 申込不要 定員30名